

# 儀崎敦仁著 『北朝鮮と観光』

毎日新聞出版, 2019年

著者と評者は同い年であり、北朝鮮に初めて観光で渡航したのも同じ1994年である。以来、著者とと同じく北朝鮮に深い関心を持って同時代を生きてきたにもかかわらず、評者は北朝鮮観光を研究対象とすることには全く思いが至らなかった。本書を手にしたとき、北朝鮮を研究する者としては不意を突かれたような感覚に包まれたことを吐露しておきたい。

さて、北朝鮮と観光という先行研究のほとんどない分野を開拓すべく、丹念な一次資料の収集と情報整理に努めた本書は、日本における北朝鮮観光の黎明期から現在までの記録としても後世に残す価値があるものとなっている。関係する旅行会社の変遷などもう少し深く突っ込んだ考察が欲しかった部分もあるが、今後の研究の進展に期待したい。

また、やや物足りない点もあるが金正恩政権期の観光戦略についても考察されており、そこから国内経済の活性化や制裁下での外貨獲得手段としての側面など、現在の北朝鮮を分析する上で不可欠な視点をも提供している。多面的な資料から立体的な北朝鮮像を描き出すという著者が得意とする手法が、本書では如何なく発揮されたといえよう。

北朝鮮観光については、本書の第6章でも取り上げられているように、現地での体験を記した紀行文の類はこれまでも数多存在する。しかし、北朝鮮観光の意義や背景を考察した類書は、本書で「画期的」として紹介される宮塚利雄の『北朝鮮観光』（JICC出版局、1992年）を除きほぼ存在しないという。著者が「はじめに」で指摘するように、北朝鮮の「観光分野について包括的な理解を得られる研究成果は少ない」のである。

北朝鮮は一般的に渡航障壁が高い国であると見られている。そこには国交がないといった政治的

な理由に加えて、他の近隣アジア諸国への観光と比して高額になるという費用的な難点があること。また純粹に旅を楽しむ側面からも旅程変更が現地で突然言い渡される可能性があることや、個人での自由な行動は認められないといった問題を抱えているためである。加えて現在、日本政府は北朝鮮への渡航自粛勧告を出している。こうした北朝鮮観光につきまとう特性を本書では事例を挙げて紹介しており、実践的な観点からも役に立つ情報が多い。そういった意味では研究書であると同時に、実用書という価値も備えているように思うが、それは本書の価値を減じることにはならない。以下、本書の内容について見ていく。

まず、「はじめに」では、北朝鮮の外国人観光客の受け入れが体制宣伝と外貨獲得を目的に進められてきたとして、金正日政権期と金正恩政権期の観光概況を明らかにするという本書の主旨が説明される。

序章では「北朝鮮観光を読み解くうえでの基礎知識を最近の情勢を概観する形で提供する」とした解説が続くが、本書のテーマとは直接関係のない記述も目立つ。専門書として売り込むのは営業的に難しいので、出版社側が北朝鮮の情勢分析という要素も織り交ぜておきたいと考えてねじ込んだのかと邪推してしまうが、本書の主たる読者を専門家ではなく一般層と想定して、このような章立てにしたのかもしれない。

第1章では「パンフレットで知る北朝鮮」として、資料に基づきモデル旅程や各地の観光コースなどが紹介され、さながら紙上ツアーの風情が味わえる。現地での携帯電話やインターネットの利用状況に加えて、外貨兌換券が廃止された現在は両替せずに国際通貨がそのまま使用できるといった説明もあり、読者をしてガイドブックを読んで

いる感覚に陥らせる。また、日本人観光客はどこかの旅行会社から申し込んでも全て朝鮮国際旅行社(KITC)がアテンドすることになるため、基本的な条件は変わらないとしている。ここに評者が付け加えると、申し込んだ(日本や中国の)旅行代理店を通じて出していた参観希望地が現地にきちんと伝わっていないことも多い。これは外国人を行かせたくないため意図的に知らぬふりしているのか、北朝鮮社会の効率性に左右されているだけなのかという、後者の面も否定できないように思われる。要するに、交渉次第では意外に通ってしまう要望もある。また本書では触れられていないが、北朝鮮観光のリピーターたちにとって、日本からの土産や事実上のチップに当たる心づけを現地ガイドに渡すことは暗黙の了解となっている。もちろん義務ではないが、これは高額な旅費以外にさらに経費がかさむ要因となる。こう書くとワイロ的な負の要素を連想させてしまうかもしれない。確かに観光客側にもさらなる融通を利かせてもらえることを期待しての「鼻葉」だとの認識はあろう。しかし朝鮮国際旅行社の日本語担当者は少なく、毎回何名かの同じ人たちと接することとなる。ゆえに顔なじみの関係となりやすいため、純粋にコミュニケーションツールとしての要素もある。パンフレットなど公式資料からは、北朝鮮観光が通り一辺倒に決められた枠内でのみ催行される単調なもののように見えてしまうかもしれないが、実際にはもう少し柔軟性があることも指摘しておきたい。けれども外国人が訪問できる都市は決まっており、自由行動不可の原則は変わらないため、本書があげるようなモデルコースを踏襲するケースが必然的に多くなるだろう。

北朝鮮の観光地について本書は、①自然の景勝地、②世界文化遺産や史蹟、③指導者の業績を紹介するもの、④北朝鮮を代表する「記念碑的建造物」など4つを挙げ、特に③と④が共産主義テーマパークとして日本人観光客を惹き付けるものではないかとしている。そして、まさにその代表的なスポットである万寿台の金日成・金正日銅像について、本書では2016年秋ごろから参観できなくなったという情報を紹介している。評者も2017年に訪朝した際に「10日ほど前から外国人

が接近できなくなった」と説明された。だが、別の受け入れ団体経由で同時期に訪朝した日本人が参観できたという情報も確認しており、朝鮮国際旅行社が独自に講じている措置なのかもしれない。2018年に訪朝した際は強く希望したところ、申請手続きとか色々あるらしいのだが連れて行ってもらえた。

第2章では「金正恩時代の観光戦略」として、馬息嶺スキー場、元山葛海海岸観光地区、陽徳温泉などの開発、特殊経済地帯や韓国との観光事業推進、ウェブサイトによる観光発信などが紹介されている。興味深いのは、陽徳温泉が外国人観光客ではなく国民向けの施設としてオープンしたことと、北朝鮮で国内観光の萌芽が見られるという指摘である。陽徳温泉については、今後海外からの観光客向けに開放される可能性もあるため純粋に国民向けの保養施設を前提に建設されたとは言えないかもしれない。しかし国内観光については近年増加していると見られる新興富裕層をターゲットにした、政府管理下で国内経済活性化を試みる政策の一環だとする。情報が断片的にしかないため、北朝鮮国内で観光がどの程度人々の余暇として浸透しているのか明らかではない。ただ、評者も2017年に訪朝した際、朝鮮国際旅行社のガイドから中朝関係の悪化でガラガラとなった平安北道・東林にある山奥のホテル(中国丹東の旅行社が投資)が、地元一般客向けにも開放されているということと、国内の観光振興を政策として行っていると聞いた。確かにそういう動きはあるのだろう。北朝鮮国内でのインバウンド効果が経済にどのくらい影響するのか、注目される場所である。

なお、本章では近年の外国人観光客の動向にも触れられており、出典のない形で羅先の日本人観光客数(第1章でも清津の観光客数)が紹介されるなど、著者が独自の情報ルートを持っていることをうかがわせる。また、北朝鮮観光を請け負っている旅行社とそのウェブサイトのリストも掲載されているので、色々な情報を直接確認するのに有用である。

第3章では「北朝鮮観光史—1987～2019」として、一般の日本人観光客に門戸が開かれた1987

年から本書刊行時点までの北朝鮮観光と関連した動きが整理してまとめられており、本書の中心をなすともいえるパートである。詳述されていないが前史として、北朝鮮は1965年からソ連・東欧圏の観光客の受け入れを始めており、1975年から在日朝鮮人の祖国訪問も実施してきたという。また1986年に政務院（内閣）直属の国家観光指導総局が設置されるなど、1987年の日本人観光客受け入れは、国家の観光政策の大きな転換に当たって始められたものと解釈できるとする。

そして、金日成主席が1991年に観光業は金を稼ぐことだと認識していたのに対し、金正日総書記は観光業で稼いだところで経済を發展させたりすることはできず、北朝鮮の現実に合わないとして1998年に発言しており、北朝鮮の指導者は内外環境に合わせて方針を変化させてきたと指摘する。ゆえに、経済制裁が強化されている現在の北朝鮮において、その対象とならない観光分野重視の姿勢が出てくることも自然の流れだと分析する。ただ1998年には、本書で記述されるように対外経済協力推進委員会の研究員が新潟・北東アジア会議に参加して観光ブースを設けて宣伝活動をしたり、丹東での日本人向け観光査証発給業務が開始されたりするなど、むしろ積極姿勢も垣間見える。金総書記の言葉と矛盾するのではないかという疑問を感じた。

本章の説明で1987年以降も中断と再開を繰り返してきた北朝鮮観光の歴史は、日朝関係や核問題の影響など、北朝鮮をめぐるリアルな現実とリンクしていることが浮き彫りとなる。しかし本書は、第十八富士山丸事件（1983年）について触れていない。この事件は「日本人が北朝鮮に渡航した際に安全が保障されるか」という基本的な問題との兼ね合いで、拉致問題が表面化する以前の日本では強く意識されていたように評者は見ている。

本章には、観光客側ではなく主催者の視点で北朝鮮観光を見た記述もある。現在、日本政府は国内旅行社に対して、北朝鮮の企画旅行については企画・実施しないこと、手配旅行についても旅行者（顧客）に旅行を取りやめることを勧めるように指導している。そのため基本的に手配旅行という形をとっている前提なのだが、北朝鮮側による

一方的な受け入れ中断や日程変更などのリスク回避のため（企画旅行でキャンセルが生じた場合は旅行会社に保障責任が生じる）、すでに今世紀初頭から北朝鮮旅行は手配旅行へと重心が移ってきているという指摘である。総合旅行業務取扱管理者資格を持つ著者ならではの視点だろう。

第4章では「韓国人の北朝鮮観光—開城観光とは何か」が取り上げられている。金剛山観光と開城観光の実施に至る経緯や実情などが、データも交えて比較的分かりやすくまとめられている。これは外国人の参加も可能ではあったものの、やはり金剛山・開城観光事業は純粋なインバウンドとは一線を画するものだろう。金剛山の独占開発権を結ぶため現代グループが支払った対価は、純粋な観光開発としては額が大きい。経済合理性だけでない要素がそこには確かに存在する。なお、2008年7月に北朝鮮軍人による韓国人女性観光客の射殺事件が起きて、この観光事業は中断してしまった。また著者は、南北間の観光事業が北朝鮮に変化をもたらすきっかけになったのかという問題について、北朝鮮が予想した以上に国内社会に悪影響を及ぼしたと捉えている可能性を指摘する。

ちなみに本章の164頁に、北朝鮮の重要施設に韓国人の名前が冠されたのは「柳京鄭周永体育館」が初めてとしているが、「金鍾泰電気機関車連合企業所」の例がすでに1969年にあるのではないかと指摘している。

第5章「ガイドブックで見る北朝鮮」と第6章「日本人は北朝鮮をどう観てきたか—『旅行記』の歴史」では珍しい書籍も渉猟しており、日本社会における戦後の対朝鮮半島の認識の変遷を知る上でも興味深い。1970年代までは北朝鮮の体制礼賛一色なのは、そう書いてくれそうな人士ばかりを北朝鮮が招待（入国許可）しているので当然なのだろうが、一般の人たちも訪朝できなかつたため、その内容が正しいかどうかを検証される心配もなかつたからでもあろう。一部の知識層が情報を独占して、世論を形成できた時代ならではの。ただ著者は北朝鮮を訪問して得られる知見を情報源とすることには、現在でもその限界があることを指摘している。行動制限と強い監視下にある観光客が見聞できる範囲は限られているこ

とと、相変わらず査証発給段階で振るい分けがされているという点である。ゆえに北朝鮮は外貨獲得よりも体制宣伝を優先していると分析する。

本書では、北朝鮮の観光政策は政治・外交の直接的影響を受けざるをえず、むしろその一環でもあったとする。その影響は観光客数に如実に反映され、緊張が高まると減少し、2018年のように南北・米朝首脳会談の実施で平和ムードが高まったりすると一挙に増加する。そうした中で、「体制宣伝」、「外貨獲得」、「インバウンド増加に伴う北朝鮮側のデメリット」という三者のバランスについて、北朝鮮は政策的にコントロールできているのだろうかという問いに著者は明快な答えを出していない。体制宣伝という点では日本で北朝鮮に好ましい評価が広まっているようには見えない。外貨獲得についてはある程度成功しているのかもしれないが、実態はなお不透明である。そして観光客数増加によるデメリットについてはすでに受け入れ観光客数を制限するという措置も発表され

ているため、対応が追い付かなくなっている側面は現実としてあるのだろう。北朝鮮当局が最も警戒する外部情報の流入については、統制のきいた観光客によってもたらされる部分大きいとは考えにくいのだが。

いずれにしろ2020年は新型コロナウイルスにより、全世界的にインバウンドは壊滅的な打撃を受けている。北朝鮮はウイルス流入阻止のため、国家非常防疫体系を導入するとして2020年1月下旬に中口との国際線運行を停止し、外国人受け入れを完全に遮断した。グローバルな人の移動がポストコロナの環境下でどの程度回復するのか、またそれまでにどれほどの時間がかかるのか全く分からない状況にある。制裁の影響を受けにくい経済活動として、観光という外貨獲得手段を失った北朝鮮はますます苦境に立つことが考えられる。本書は北朝鮮の観光業に今後も注目する必要があることを示唆してくれる。

(堀田幸裕 霞山会)